

藤原宮第19－1次の調査

(昭和51年5月)

この調査は、家屋新築に伴う事前調査として実施したものである。調査地は、藤原宮の東外濠SD170の想定位置にあたる。幅1.5m、長さ9mの東西トレンチを設定して調査を行った(表紙裏の地形図参照)。

調査の結果、南北大溝1を検出した。発掘区の土層は、上から耕土・床土があり、溝の両外側の部分は直接灰褐色ないし黄褐色の砂質の地山に至っている。溝は断面逆台形を呈し、溝堆積土の上面で幅5.3m、深さ0.7mを測る。溝の堆積土は数層に分かれ、最下層の暗灰色粘土層から手斧の削り屑を含む多量の本片とともに木簡19点が出土した。釈読可能なものは、習書と思われる次の一点のみである。

表	「	□	春	春部己酉部丸部	□	人	」
		□		□□□□□	□□		
裏	「	□		□□			」
		□	□□□	人	人	阿□□	
					(郷カ)		

出土遺物には、この他に少量の瓦、土師器、須恵器の破片がある。

この調査によって検出された南北溝は、宮東外濠SD170に相当する。既に調査されている宮東北隅における東外濠の心と、今回検出の溝心とを結ぶ線は、国土方眼の北に対して西へ46°30'の振れを持っている。宮南門の中心と北門の中心を結ぶ宮中軸線は、N26°30'Wであり、宮東外濠は宮中軸線に対して北で西に20°振れることになる。今回の調査によって、宮東外濠は宮東北隅から約64.3m南の地点まではほぼ確定できたことになる。なお、国土方眼による今回検出した地点での宮外濠心の位置は次の値をとる。

$$\begin{pmatrix} X = -166.104.0 \text{ m} \\ Y = -16.942.0 \text{ m} \end{pmatrix}$$